

東桜コンピテンシー「①ビジョン」について ～その10～

①「ビジョン」

数年～数十年単位の中長期的な目標として、望ましい社会や理想とする自分の姿を思い描く力。

「人類の歴史は感染症との戦いだった」という言葉を最近よく見かけるようになりました。

例えば、14世紀に流行したペストは、ヨーロッパの人口の3分の1以上を死亡させるほどの恐ろしい病気でした。

その後、17世紀、ヨーロッパで第2次のペストの流行がありました。

あのアイザック・ニュートンが学生のと看、このペストの影響でケンブリッヅ大学も閉鎖されることになり、1665年から1666年にかけて、彼は故郷のウールズロープへ戻り、自由に思考する時間を得たそうです。

「リンゴは落ちたように見えるが、実は、落ちたのではなく、地球に引っ張られたのだ。そしてリンゴの方も地球を引っ張っている。

もし、地球とリンゴの質量が同じだったら、お互いに引っ張り合って出会う点は、2つの距離の間になるはずだ。

しかし、地球はリンゴに比べ圧倒的に質量が大きい。質量の大きいものは動きにくいため、地球はほとんど動かず、リンゴと地球が出会う点は地上になってしまう。引っ張る力は同じでも、結果としてリンゴは地球に落ちたように見えるのだ。」

感染症により、思索に没頭できる時間ができたことが、偉業を成し遂げるきっかけになったのかもしれない。

微分積分や、光学のプリズムでの分光の実験、万有引力の着想など「ニュートンの三大業績」とされるものは、いずれもペストを逃れて故郷の田舎に戻っていた18か月間の休暇中にできたそうです。そのため、故郷に戻っていたこの期間は「ニュートンの創造的休暇」と言われるようになりました。

なんとニュートンはそのとき、まだ25歳前です。



20世紀に入ってまもない1905年、スイスのベルン特許局で働く一青年により、人類の自然と宇宙に対する理解を根底から変える偉業が達成されました。

光が周波数に比例するエネルギーを持つ粒子（光子）であることを光電効果の説明から疑いようもなく見出した光量子仮説、私たちの空間と時間の概念を変えることになる特殊相対性理論の誕生です。

このとき、アルベルト・アインシュタインは26歳でした。



現代に目を移すと、
GAF A の一つである Google が 1998 年に誕生したとき、
創業者のラリー・ペイジ（右上の写真）とセルゲイ・ブリンは
共に 25 歳。スタンフォード大学の PhD 学生でした。



また、Facebook の創業者マーク・ザッカーバーグ（右下の
写真）は、ハーバード大学在籍中の 2004 年にソーシャル・ネ
ットワーキング・サービスサイト「Facebook」を 19 歳で立
ち上げました。



ほかにも、例えばノーベル賞を受賞した科学者などの独創的な発想は若いころに生
まれていることが数多くあります。

昨年、ノーベル化学賞を受賞した吉野彰さんが、リチウムイオン電池の研究に取り
組み始めたのは 33 歳のころだそうです。吉野さんは三十代半ばの年代が特に大事だ
と語っています。

「シン・ニホン」の中で安宅和人さんは、次のように述べています。

「世の中を本質的に刷新したと言える人たちを俯瞰してわかるのは、驚くほど若い
人が多く、30 代前半までに挑戦の開始が集中しているということだ。歳をとったら
無理だと言っているわけではない。「ヤバい」未来を仕掛ける担い手として若者が本
当に重要だということだ。

若者を主語にして考えれば、若さは才能であり、1 日 1 日と目減りしていくリソー
スと考えるべきだ。僕らミドル、シニア層がこの若い人たちの挑戦を妨げることなく
サポートしていくことが、どれほど大切なミッションかということもわかる。」

私自身、読んでいて大いに共感した部分でした。

（引用・参考文献）

「シン・ニホン AI×データ時代における日本の再生と人材育成」（安宅和人著、株
式会社ニューピックス）

令和 2 年（2020 年）5 月